
流星のロックマン4 ~ the planet ~

galaxy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロッキーマン4 the planet

【Nコード】

N7316W

【作者名】

galaxy

【あらすじ】

メテオGの事件から数ヶ月がたち、6年生になったスバルたち。しかし、地球に4度目の危機が迫る！果たして惑星の守護者たちの侵略をとめられるのか？ミソラとの関係は？蒼き流星が今立ち上がる！！！！

〜プロローグ〜（前書き）

下手ですが、よろしくお願ひします。
キャラ崩壊するかもしれません。

くプロローグく

く太陽系中心部く

「そろそろ、太陽系の電波の周波数も変えなければな．．．ほぼ全宇宙で変えて いるからな．．．より良い環境のために．．．」

低く威厳のある声が響く。

「そんなことしたら、地球は．．．!」

「うるさい、お前は黙って聞いていればよいのだ、アースよ．．．さっきの声の主はアースというらしい。」

アースはしばらく考えた。

「．．．でも、私にはできません、そんな事!」

「フッフ．．．それなら仕方ない、マーキュリーにやらせよう．．．俺の命令に 従わないお前にはここで消えてもらおう．．．!」

「くっ!」

攻撃を少しくらったものの、すぐに、アースは眩しい光とともに消えてしまっ た。

「奴を追えっ!マーキュリー!周波数を変えないなら、奴の星もろとも破壊して やれ．．．!」

「はっ!!!!」

アースと同じようにマーキュリーも消えた。

「アースよ!私に逆らった罰を思い知るがいい!」

くスバルの家く

「スバルく起きなさい！」

「は〜い・・・」

スバルは今日から6年生として、最後の小学校生活を送ろうとしていた。

「スバルももう、6年生か・・・」

この人は星河大吾といいスバルの父親で、数ヶ月前まで事故で行方不明になっ ていた。

「早いわねえ・・・」

この人はスバルの母親で、星河あかねだ。

5分くらいたって、スバルがリビングに来た

「忘れ物してない？大丈夫？」

「大丈夫だよ、ね？ロック？」

「ああ、おふくろ、スバルのやつ、何回も確認してたぜ」

このバケモノみたいなのはウォーロックと言ってAM星人で、今はスバルのワイ ザードだ。この2人が電波変換すると、世界を3度救ったヒーローロックマン になる。

「じゃあ、いつてきま〜す」

「ちよつと待った！実はプレゼントがあるんだ・・・」

「えっ！なにっ！」

「はい、新しいハンターV.G」

「あ、ありがとう！早速ウォーロックを移動しないと・・・いくよ」

「おっっ！」

ピ。ピ。ピ。ピッ！

「イドウカンリョウシマシタ」

「うおー！！！！」

「大吾、これ超快適だぞ！サンキュー！」

「それなら良かった」

「ありがとう、父さん！じゃあ、いつてきま〜す」

「いつてらっしや〜い」

そして、スバルは家を出た。

「お前本当に変わったよな・・・」

「ロツクのおかげだよ」

「・・・というより、早く行かないとやばくないか？また、怒られるぞっ！」

「大変だ～～～！！急がないとまた、委員長に怒られちゃうよ！」
そして、スバルはダッシュでコダマ小学校に向かった・・・

始業式

「ふう〜・・・やっと着いた・・・ギリギリセーフだね・・・」
「セーフなわけないでしょっ!!! 初日から、何遅く来てんのよっ
!?!?!」

「げっ!・・・ごめん、委員長っ!」

「私は生徒会長なのよっ! 初日から遅く来るなんて・・・」
ガミガミガミガミ・・・

「・・・まあ、今日のところは特別許してあげるわ!」

ふう・・・ 大きなため息。

「早く行くわよっ!」

「はっ・・・はい!」

そして、スバルたちは、体育館に向かった。

「あいかわらず、朝から元気のいい奴だったな・・・」

「そうだね・・・」

（始業式）

「・・・であるからにして・・・私は・・・」

パンツ!

突然、体育館の照明が、暗くなった。

「なんだっ!」

「うわっ!」

「こわいよ〜」

「・・・オイ、スバル、ビジライザーかけてみるよ」

「えっ・・・あっ・・・うん」

ウォーロックに言われたとおり、スバルは、ビジライザーをかけた。
た。

そして、上の方を見上げると・・・

「あっ! ウイルスだっ!」

「スバル、電波変換して、あいつらをやっつけちまおうぜ!」

「えっ！ここで？」

「今は暗いから、誰もわからないはずだっ！急げっ！」

「うっ・・・うん」

スバルは電波変換し、ウイルスたちの方に向かった。

「スバル、バトルのやり方はおぼえてるよな？」

「覚えてるよ！」

「じゃあ、いくぞっ！」

ロックマンとなったスバルは、華麗にウイルスたちをデリートしていく。

「とどめだっ！バトルカード、ソード！！！」

ウイルスたちをデリートしたスバルは、故障しているところをなおし、体育館に戻った。

「どこいったの？スバル君？も、もしかして、ロックマン様に変身してたわけじゃ・・・」

「ごめん、委員長、僕・・・」

「さすがはロックマン様ね・・・ってスバル君をほめてるわけじゃないからねっ！」

「わかってるよ・・・」

「さあ、これからよっ！」

「これからって、何？」

スバルが首をかしげると、キザマロが、

「クラス替えですよ、スバル君」

「何だ、それ？おいしいのか？」

と、ゴン太。

「去年もあつたじゃないですか！ゴン太君、クラス替えとは、違う学年になった時、クラスのメンバーを変える事ですよ！」

「まあ、私たちブラザーが、別々になる事はないけどね！」

「そうだな、委員長！」

「じゃあ、今年もよろしくね、キザマロ！」

「ハイッ！こちらこそです、委員長っ！全力でサポートをさせても

「らいますっ!」

「今年は少しくらいやせなさいよっ!ゴン太!」

「おっ・・・おっ」

「スバル君、今年もよろしくね!私に何かあったら、ロックマン様になっで、すぐ助けるのよわかった?」

「うっ・・・うん」

「あっ・・・そうだ、僕新しいハンターV.Gにしたから、また、ブラザー結び直してくれない?」

「わかったわ」

「おっっ!」

「ハイ、喜んでっ!」

そして、スバルは3人とブラザーを結び直した。

始業式（後書き）

お決まりのバトル入れたみたんですけど、どうでしたか？みなさん、気軽にコメントとかしてくださいね。

クラス替え

「じゃあ、先行ってるから、早く来なさいよ」

そう言っつて、3人は行っつてしまった。

すると、ウォーロックが、

「あのうるさいオンナと、やっと離れられるかもしれないんだよな？」

と言い、笑っている。

スバルは、苦笑いを浮かべ、6年生の部屋がある3階に行った。

3階では、クラス発表が、もう始まるうとしていた。

「これから、クラスの名簿を全員のハンターV.Gに送りまゝす」
しばらくして・・・

「あつ！メールが来た！」

「どれどれ・・・僕は、6ーAだな」

「他のみんなはどうだろう？」

スバルは、他のみんなを探した。

「・・・えっ・・・嘘っ!？」

スバルは何度も目を凝らして見た。

しかし、変わる訳もなく、ただ悲しい現実がそこには書いてあった。

「キツ・・・キザマロが・・・」

そう、キザマロだけB組だったのだ。

そして、委員長たちがやってきた。

「みっ・・・グスツ・・・みなさん・・・」

「キザマロっ!・・・だ、だらしないわね!・・・わっ、私たちは、

ブラザーでしょっ!そんなことで、泣いててどうすんのよっ!」

確かに、委員長の言っつたとおりだ。

「そっつだぞっ!キザマロ!何かあつたらすぐ俺に言え!助けてやるからなっ!」

「うつつ・・・委員長・・・ゴン太君・・・」

「僕も手助けができることがあったら言ってね」

キザマロはだいぶ落ち着いてきたようだ。

「ありがとうございます、みなさん・・・ぼっ、僕がんばります！」

「そろそろ教室に行かないと・・・じゃあ、放課後会いましょう、キザマロ」

そう言つて、僕ら3人は教室に入った。

スバルたちの担任は育田先生で、副担任は、メテオGの事件以来コダマ小学校で働いている、クインティア先生だ。ちなみに、弟のジャックもA組だ。

しばらくたつて・・・

「今日はこれで解散！」

育田先生がそう言つと、みんな帰り始めた。スバルたちはキザマロと一緒に帰るためB組に行った。

「おまたせしました」

キザマロは嬉しそうにこっちに来た。

「実はですね、友達ができました！」

「どうやら、ニコニコしていたのはそういうことだったらしい。

「良かったじゃない！で、どんな子？」

「とても優しく、僕が1人していると声をかけてくれました！」

「良かったなっ！キザマロ」

「はっ、はい！これで学校も楽しくなりそうですっ！」

それから4人は家に帰った。

夕方になつて・・・

「今日は疲れたな」

と言つて、両親にクラスのことを伝え終わったスバルは、ベットに倒れ込むと、すぐ寝てしまった。

クラス替え（後書き）

・・・というわけで、キザマロと離ればなれになってしまいました。
少し間が空いてしまいましたが、読んでいただければ、光栄です。

いきなりの事件

〈始業式から一週間後の夜〉

「俺の命令に従わない星は消すと言っただろ!!!」

そう言っつて1つの惑星が消えた・・・

すると、突然マーキュリーと思われる影が現れた。

「クシ様、ロックマンをご存知ですか？」

「知っておる・・・それがどうした？」

「あとあと、やっかいになるので、排除しておいてもよろしですか？」

「いいだろう」

そして、マーキュリーと思われる影は消えていった・・・

〈朝〉

スバルは学校の支度をしてニユースを見ていた。

「大変なニユースです!!!只今、昨日天王星が消えたとWAXAが発表しました!!!天王星は……」

ブチッ!

スバルは電源を消した。

「お父さん、本当!?!」

スバルはとても驚いた様子だ。

「残念ながら・・・」

最後まで聞かずにスバルは学校に行ってしまった。

学校でもその話でもちきりだった。

〈休み時間〉

「スバル君はどう思う?」

委員長に聞かれ考ええるスバル。

「こんな事はある得ないと思うよ……でも、僕は地球がこうなっちゃったら……なんて考えちゃった」

「それは心配し過ぎだろ、スバル」

「そ、そうだよね」

スバルは笑ってごまかした。

「今日の昼は牛丼だ〜!!!」

「食べ過ぎないようにしなさいよ!」

「おっ、おっ……」

すると、突然、水が教室に入ってきた。

「うわぁ!水がっ!」

「いきなりなんだっ!みつ、水!？」

「きゃあ〜!」

どんどん水が増えてくる。

しばらくすると、水の増えが止まり、放送が入った。それは、聞いた事のない声だった。

「ロックマンに次ぐ……ここにいる全員の命を助けたければ、水道コントロールの電脳に來い………30分待つてやる」

「おい、どうすんだ?」

「行くよ!どんなやつか知らないけど、学校をめちやくちやくにするなんて許せない!」

そして、スバルは電波変換して、水道コントロールの電脳に行った。

電脳世界では、水が流れていて奥に行くのは大変だった。

何度も流され奥につくと、

「ここに、強力な電波を感じる……」

スバルも感じていたが、メテオGのクリムゾンドラゴン戦の時くらいに電波を感じた。

「ようこそ、ロックマン……私は、マーキュリー」

余裕の表情でマーキュリーは笑っている。

「何者だっ!!!何のためにそんな事するんだ!」
すると、

「私は惑星の守護者の1人……目的はお前をデリートし、地球をとある星とおなじ運命をたどらせる事だ」

と言い、今度は、残酷な目つきで睨んできた。

いきなりの事件（後書き）

ちよつと中途半端に終わらせました。次回はついにマーキュリーと対決です。

ちなみに、マーキュリーは、水星の守護者なので、水属性です。

水星の力

「ある星ってまさか・・・」

「そう、天王星だ」

あいかわらず、マーキュリーは冷たい目つきで睨みつけている。

「さあ、無駄話は終わりだっ！行くぞっ！」

ついにバトルが始まった。

「いくぞっ！バトルカード、プラズマガン！」

しかし、水のバリアでスバルの攻撃は、かき消されてしまう。

「無駄だっ！このバリアがある限り、俺に指一本触れる事はできねえ！今度は、俺の番だっ！くらえっ！アクアボム！」

すると、水色の球体が3個マーキュリーの手から発射された。そしてすぐに、3つの球体は大爆発を起こした。

「ぐあっ！なんて威力だ…でも今がチャンスだっ！くらえっ！エレキスラッシュ！」

攻撃した瞬間の隙をつき、スバルは攻撃した。

しかし、カウンターを取られ、逆に隙ができてしまった。

「くらえっ!」

すると、いきなり、足もとから触手のような物がでてきたかと思うと、体に巻き付き、スバルは身動きが取れなくなってしまった。

「ぐああっ!」

巻き付いた触手が、スバルの体を締め付ける。

「どうだ、己の無力さをあじわったか？」

そう言いながら、次の技の用意をし、触手が消えてすぐに水色のレーザーを浴びせようとしていた。

「くっ!インビジブル!」

「無駄だっ!」

相手の言つとおり、スバルはもろにダメージを受けてしまう。

「くっ!インビジブルが効かないなんて……」

スバルは、次々にダメージを与えられ、ぼろぼろになってしまっていた。

「リ、リカバリー!」

回復したスバルはあきらめず、攻撃をしかける。

「いけっ!ウインディアタック!」

この技でバリアをはがし、すかさず、スタンナックルでスバルはダメージを与えた。

「いけっ！ボルテックアイ！」

スバルは、狙いを定め、ボルテックアイを命中させた。

「くっ！小癩な！仕方がない、この技を使うしかない……アクアボルテックス！」

すると、大きな渦潮ができ、飲み込まれたスバルに、追撃を食らわそうとしたその時、青い稲妻が、マーキュリーに落ちていった。

水星の力（後書き）

多分次回でマーキュリー戦終わりです。

青い稲妻を使った正体は、しばらくお預けです。

ちなみに、レーザーは対インビジブルです。

今回は、感想を参考に行を空けてみました。読みやすくなっていると
いいです。

ペットは電波獣

「ぐあっっ！な、何だ？」

スバルは渦潮から抜け出し、隙だらけのマーキュリーに追撃をくらわそうと準備する。

「くっらえっ！ソードファイター！」

ソードファイターと呼ばれる技でマーキュリーを連続で斬りつける。

「くっ…調子に乗るなっ！」

マーキュリーは青い剣で怒濤の勢いで攻めてくる。しかし、スバルにはその攻撃が読めていた。なぜなら、ブライと今まで戦ってきた、この程度の攻撃ならよけるようになってきていたのだ。逆に、この程度の攻撃をかわさなければ、とつくに、デリートされていたはずだ。

「この程度の攻撃なら、簡単によけられる！そこだっ！エレキストラッシュ！」

だいぶマーキュリーは疲れていた。

「やるな……しかし、ここまでだ…！」

そう言うと、マーキュリーの体が、青く光りだし、しばらくたつと青い光が消え、傷がなくなった状態で復活した。

「そんなっ…！」

形勢逆転したマーキュリーは疲れているスバルに容赦なく攻撃を浴びせる。

「俺は、好きなときにいくらでも回復できるのさ…それっ！くらえっ！」

「チツ…！厄介なヤロウだっ…！」

「ロック、どうすれば…クツ！」

「スバル…方法は1つだけだ…それは、回復が追いつかないくらいに攻撃するってことだ」

しかし、今のスバルはそんなに攻撃できる余裕はなかった。

「君の最期にいい物を見せてあげよう」

すると、青い魔方陣が現れ、そこから1匹の竜が現れた。

「これは電波獣といって特別な者だけがもってるペットさ…君の最期にちょうどいいだろう？…いけっ！マーキュリードラゲリオン！お前の力を見せてやれ！」

ペットは電波獣（後書き）

すみません。今回で終われませんでした。次回で終わらせるつもりです。

特別編の募集もしますので、よろしくお願いします。

決着！（前書き）

ついに決着です。

決着！

マーキュリードラゲリオンは青いレーザービームのような光線で攻撃を仕掛けてきた。スバルは間一髪よけるが、マーキュリーの攻撃にあたってしまう。

「なんて不利なんだ……このままじゃ勝ち目がない……どうすれば……あっ！ そうだ！」

何かを思いついたらしく、マーキュリードラゲリオンの方に向かっていく。

「やっちまえ！ マーキュリードラゲリオン！」

しかし、スバルは向きを変え攻撃をかわそうといきなり必死に逃げ出した。

「チツ……！ 仕方がない、アクアジェットだ！ ドラゲリオン！」

すると、速さが増しすごい勢いでスバルたちに迫っていく。

「くっ！ まだだ！ ジェットアタック！」

本来は攻撃技だが、スバルはこの技を加速するために使った。

「フンツ！ 甘いつ！」

すると、逃げた先にマーキュリーが立ちはだかる。

「はさみうちか……いくぞっ！スバル！」

「うんっ！熱斗君からもらったカードの力みせてやるっ！」

光熱斗……クロックマン事件の時クロックマンが逃げた時代にいた、ロックマンをオペレートする小学生だ。彼からもらったチップと呼ばれる（今で言うカード）物をスバルは天地さんにカード化してもらったのだ。

「今だっ！エスケープ！」

いきなりスバルは上に飛んだ。しかし、上に飛んだスバルについていけず、マーキュリーの電波獣は、そのままマーキュリーに突っ込んでしまう。逃げるとまではいかないが、引きつけてかわすのはこのエスケープは最適だったらしい。

「よしっ！」

勝ち誇るスバル。しかし、けむりの中に、青い色が見えた。

「フツ！残念だったな、電波獣は今私の手の上にいる……くらえっ！究極奥義！アクアクライシス！」

「そ、そんなっ！」

手の上に乗った大きなボール状のものがスバルめがけて飛んでいく。しかし、宙に浮いているスバルにはよける事ができない。

「ぐあっっっっ！」

凄まじい衝撃波とともにスバルは気を失った。

↓サテラポリス本部 3階 病棟↓

「ついに、この病棟から出られる訳だな、アシッド…っってもういないのか…」

空のハンターV.Gを見つめ、ひとりつぶやく男は今日退院するよ
うだ。

「おめでとう、シドウちゃん………」

眼鏡をかけたおばあさんが声をかけたこの男はシドウというらしい。

「ありがとうございます、ヨイリー博士」

この眼鏡をかけたおばあさんはヨイリーという博士のようだ。

「残念だったわね…アシッドちゃんのこと…」

「……はい………」

そう言って2人は病室を出ていった。

決着！（後書き）

マーキュリー戦終わりました。

ついに、シドウが出てくる訳ですが、アシッドはどっせや……
次回はスバルがどうなったかです。

地球の守護者、アース！

〈太陽系中心部〉

「マーキュリーは回復能力を失い、当分戦う事はできないくらいにやられている…次はヴィーナス、お前の出番だ」

ギャラクシーは女性の電波体に声をかけた。

「わかりましたわ、じゃあ行ってきます」

そう言って、ヴィーナスは地球へと向かっていった。

「クッ…！アースめ…！」

悔しがるマーキュリー。

「まあ、そう怒るな、傷が痛むぞ」

ギャラクシーになだめられながら、マーキュリーは3日前の出来事を思い出していた。

〈3日前 コダマ小学校〉

「ロックマンよ、さらばだっ！」

気を失っているロックマンにとどめをさそうとした時、

「グラビティウェーブ！」

突然、重力波がマーキュリーの背中を襲った。

「クッ！……アースか……」

アースと呼ばれる電波体は体中が岩でおおわれ、防御がとても固そうだった。

「地球を3度も救った者を、見殺しにするわけにはいかないからな……いくぞっ！グラビティホール！」

突然マーキュリーの足下に小さな、ブラックホールのような物が現れた。

「動けないだ……！」

この技は相手の動きを封じる事ができるようだった。

「とどめだっ！究極奥義！アースインパクト！」

動けないマーキュリーは大ダメージを負い、倒れた。回復は追いつかなかったようだ。そして、アースはロックマンの応急手当をし、帰っていった。マーキュリーはその後ヴィーナスに助けられて帰った。

↳サテラポリス本部 3階 病棟↳

スバルは3日間病棟で寝ていた。

「うわっ！遅刻しちゃう！」

しかし、いきなり飛び上がり、部屋を見て驚いてしまう。

「真っ白な部屋だ…ここどこ？ウォーロック？」

「ここはサテラポリスの病室だ」

病室と聞き驚くスバル。

「僕、気を失ったんだ…」

「スバル、失礼するわよ」

ドアが開いてあかねと大吾が入ってきた。

地球の守護者、アース！（後書き）

少し短かったです。

次回ついにあの人と再開します。

再開

「無事で良かった…」

あかねはかなり心配していたようだ。

「ごめん…母さん…父さん、僕はどうやって助けられたの？」

スバルはそのことが気になっていたようだった。

「サテラポリスの人たちが倒れてるお前を助けてくれたんだ」

(…とどめはさされなかったんだ…)

すると、外から声がした。

「ちょっと、失礼していいかしら」

「ヨイリー博士！お久しぶりです」

「久しぶりスバルちゃん、ウォーロックちゃん」

そしてヨイリー博士は、ドアの外を指差しながら言った。

「みんないらっしやい」

すると、委員長、ゴン太、キザマロ、ミソラが入ってきた。

「スバル君、大丈夫？」

「大丈夫か？スバル？」

「スバル君…無事で良かったです」

「久しぶり〜大丈夫？」

と、みんなスバルの心配をしてくれているようだった。とくにミソラは芸能界で働き、忙しいのにお見舞いに来てくれていた。

みんなで久しぶりに色々楽しくしゃべっているとドアの外で…

サクサクサクサク……

懐かしい音が聞こえて来た。

「久しぶりだな！スバル」

「暁さん！大丈夫だったんですか？僕、もってつきりだめなのかと…」

そしてサテラポリスの暁シドウがやって来た。彼はメテオGの事件でみんなを守るために死んでしまったと思われていたが、ブライトとクインティアとジャックのおかげで委員長と同じようにして帰って来たがしばらく入院していた。

「俺はこのとおり大丈夫だ、お前も大丈夫か？」

「大丈夫です…そう言えばアシッドはどうですか？」

「……あいつはもう……いない……」

衝撃の言葉にスバルは返す言葉もなかった。

「あいつは……」

「暁さん……なんか……すいません」

「お前が謝る事じゃない……あの日は、お前らを守るのに必死だった……」

再開（後書き）

次回はシドウが復活するまでの話です。

アシッドはもういない

（去年 デイラーアジト）

スバルはグレイブ・ジョーカーとの戦いに勝った。しかし、ジョーカーは周りを巻き込み自爆しようとする。するとアシッド・エースとなったシドウがジョーカーの爆発を止めようとした。

「曉さん！」

スバルの声がある…

「シドウ、これは私の問題です、いまずぐ電波変換を解いてください…命に関わります」

と、アシッドは言うが、シドウは解くつもりはなかった。

「それは無理だ、アシッド…お前だけで押さえられる爆発じゃないからな」

「だめですシドウ……」

もう遅かった。ノイズを大量に含んだ爆発により一瞬でアシッド・エースは消え去った。

「曉さーん……！！！」

その後、スバルがメテオGを破壊してから、ジャックやクインテイアはブライの力を借りシドウのかけらを集めサテラポリスに渡し

た。しかし、アシッドについての事は他のサテラポリスが探しても見つかる事はなかった。ヨイリー博士によるとノイズを大量に含んだ大爆発だったため、アシッドの電波が崩壊してしまっただけらしい。それからシドウは入院し昨日までリハビリを続けていた。

〈病棟〉

「・・・と言う訳だ…俺はみんなを守るために必死であいつのことを考えていなかった…なのに俺だけ生き返って…ちくしょう！」

シドウの目に涙が浮かぶ。

「あいつ、いい奴だったのにな…」

ウォーロックも悲しそうだ。

「自分を責めないでね、シドウちゃん…私たちだけで対処できなかったことにも問題があったんだから……」

だいぶ落ち着いて来ていたみたいだった。

その後みんなでスバルの家にいき、スバルとシドウの退院パーティーを行った。ミソラは仕事があるため早く帰ったが、みんなは遅くまで楽しくしゃべっていた。10時くらいになり、みんなは帰っ

ていった。

「父さん、母さん、今日はありがとう、明日から学校だし僕もう寝るね、おやすみ」

そう言ってスバルはベットに入った。

アシッドがもういない……

僕はマーキュリーに負けた……

色々なことを考えてしまい、スバルはなかなか寝付けなかった。

アシッドはもういない(後書き)

次回は久しぶりの学校です。

ミソラがあんまり目立ってない気が…

まあ、これから目立たせていきます。

孤独なキザマロ

「スバルの部屋」

「おい、起きろスバル！遅刻するぞ！」

時計は学校が始まる10分前を指していた。

「やつ、やばい！」

スバルは超高速で着替えると、パンをくわえたまま出て行った。

「いってきま〜す」

スバルは全速力で走っていく自分をこっそり見てる1つの影に気付かなかった。

「ハア…ギリギリ…ハア…セーフだ…ハア…ハア」

スバルはかなりバテていた。そして、

「セーフじゃないでしょっ！」

いつもどおりの怒りの声と共に、久しぶりの授業が始まった。

「6 - B組」

「海碧くん遅かったですね〜」

「ごめんごめん、寝坊しちゃってさ」

今教室に入ってきて来てキザマロと話していた人は荒海あらい 海碧あおいという名で、今年から入ってきて来た転校生で、頭もよく、いわゆるイケメンで、女子からの人気も高い。

「遅かったな！海碧！」

今のは大木おほき 大和やまとといい、ゴン太よりひとまわりでかく、身長は学年でぶつちぎりのトップだ。この2人が新たなキザマロの友達でブラザーも組んでいる。

「今日は小テストの返却だぞ」

担任の言葉にみんな元気がなくなる。

そして、しばらくたち……

「それじゃあ、テスト返すぞ」今回は最小院と、大木、それから荒海が満点だ」

「やりましたね！2人とも！」

しかし、海碧は考え事をしていて聞いていないようだった。大木は聞いていたようだ。

「ありがとなっ！チビマロ！」

いつもよりきつい口調で大木は言った。

(おかしい…いつもは優しい大木君が僕をチビマロって呼ぶなんて…)

キザマロはチビマロと呼ばれるのがかなり嫌らしい。

「お前のおかげで、これからもいい点が取れそうだ…これからも利用させてもらうぜ…チ・ビ・マ・ロ」

大木の嫌な言い方にキザマロは顔を真っ赤にして怒った。

「大木君、なぜそんな名前で呼ぶんですか？本当にやめてください！！見損ないました！大木君！！」

だが、大木は笑いながら、

「ヘッ！チビにチビって言って何が悪い！だいたい俺はお前と仲良くするつもりはねえし、お前が頭がいいからそれを利用させたもろっただけだ！この際もうマロ辞典のデータはもらったことだし、お前とのブラザーなんて切つてやる！」

キザマロはどうやら大木に利用されていたみたいだ。

「絶交です！大木君！！！！」

心配になったキザマロは海碧に向かって言った。

「…ま、まさか海碧君もマロ辞典目当てですか！？」

すると海碧はあわてて、

「ぼ、僕は違うよ！キザマロ！信じてよ！」

キザマロは少し安心し、

「あ、ありがとうございます海碧君…疑ってすみません」

そして、授業が始まった訳だが、大木はずっとキザマロの事をいじめ続けた。

(明日も学校か…行きたくないな…)

その夜、キザマロは大木にいじめられる夢を見た。

くコダマタウン 公園く

だいぶ遅くなり人通りもなくなってきたコダマタウンの公園で1つの電波体が笑っている。

「フツ…いい奴を見つけたぜ…」

そう言って謎の電波体は風と共に暗闇の中に姿を消した。

孤独なキザマロ（後書き）

オリキャラ2人も出しちゃいました。

次回はかわいそうなキザマロにさらに……

勘違い

～次の日～

「今日は珍しく早いな、スバル」

スバルが久しぶりに早く学校に向かっているので不思議に思ったウォーロックが聞いた。

「今日はキザマロの誕生日だから、早く行って委員長たちと打ち合わせしないといけないんだ」

そう、今日はキザマロの誕生日だ。ドッキリパーティーをするための打ち合わせを朝からしようと委員長が言うのだ。

～5 - A組～

「おまたせ」

教室には見慣れた3人以外に1人の男の子がいた。

「はじめましてスバル君、荒海 海碧です」

荒海 碧海と名乗る男の子がかっこいいというのはスバルが見ても分かった。

(この子、かなりかっこいいな……)

「彼は、B組でキザマロと仲がいいのよ、それで今回のパーティー

に参加してもらおうと思ってるの」

そしてスバルが、

「はじめまして海碧君、よろしくね」

と挨拶すると、委員長が今日のパーティーの話を始め、みんなで相談をした。

しばらくして…

「じゃあ、早くにキザマロの家に行って用意をするから学校が終わったら、みんなでキザマロの家に集まってここといいわね？もし、鍵が開いてなかったらスバル君よろしくね？」

「…わかった」

こうしてスバルたちは計画を立て終わった。すると、ミソラからメールが来た。

「…ミソラちゃんも誕生日パーティーくるんだ…キザマロ喜びそうだね」

「そうだな…お前もまたすぐ会えて嬉しいんだろ？」

スバルの顔が赤くなった。

「そ、そりゃ、嬉しいけど…で、でも別にそういう意味じゃなくて…えーと…」

「素直に嬉しいって言えばよな！」

↳放課後↳

学校が終わり急いでキザマロの家に行き、鍵を開けたスバルたちはミソラとも合流し、中に入って用意を始めた。

その頃……………

「はあ〜今日も大木君にいじめられました…ってあれ？委員長たちも海碧君もいない…まさか委員長たちも僕の事を裏切って、みんなで遊んでるわけ…」

委員長たちが待つてくれなかったのは初めてだったのでキザマロは不安になってしまった。

「そんな…どうして…僕はなんでいじめられるのでしょうか？僕は何にも悪い事していないのに……………」

すると、風が強く吹きいきなりキザマロの前に鳥の形をした電波体が現れた。

「悩んでいるみたいだな、俺が助けてやるつか？」

キザマロはヤケになっているようで、

「僕の事なんかほっといてください！！どうせ誰も分かってくれな
いんですから！！」

と言い、家に帰ろうとするが、

「分かっているぞ、お前は孤独なんだろう？裏切られひとりぼっちに
なっちまったんだろ？それなら俺の力を使って、その仲間はずれに
して来た奴らに仕返ししてやれよ」

と言い、キザマロの前に来た。すると、ハンターV Gから

「だめです！そんな怪しいものに頼っては！」

とキザマロのウィザードのペディアが言った。しばらくキザマロ
は考えた。

(みんなに仕返しがしたい…でも…)

そしてしばらくたち、

「私はあなたを信じます！お願いします！僕に力をください！！！」

と言い、電波変換した。鳥の姿になったキザマロは高い鳴き声を
あげ、

「皆さん、思い知ってください！僕の力と頭脳を！！！」

といい、自分の家の前から姿を消した。

勘違い（後書き）

次回はキザマロが暴れだします。
少し今回は長くしました。

わし座と琴座

〈キザマロの家〉

「遅いわね！キザマロ…せっかく私が用意しているのに…！」

誰が見ても明らかであるが、委員長はいらだっている。

そしてその時、外で悲鳴が聞こえた。

「誰か助けて〜！飛ばされる〜！」

委員長たちは外に出て助けを呼んでいる人を助けようとした。しかし突然の突風に助けるどころではなくなってしまった。

「ど、どうすれば…」

するとウォーロックが、

「あそこに変な奴がいるぞ！」

ビッグウェーブの上に鳥の形をしたキグナスのような電波体があった。

「とりあえず、電波変換するよ！」

スバルが電波変換すると、ゴン太とミソラも電波変換をした。突風は電波体には影響が無いようだった。

「ゴン太は委員長たちと他の人たちを助けてあげて！」

とりあえず、委員長たちのことはゴン太に任せ、ミソラと一緒にビッグウェーブに急いで行った。

「逃がさないぞ！その電波体！」

と、スバルが声をかけるとその電波体はよく聞いているあの声でしゃべった。

「スバル君とミソラちゃんですか…僕を倒そうというなら受けて立ちましよう！」

「キ、キザマロ！？どうして…？」

すると、キザマロに取り憑いている電波体が言った。

「こいつはお前らに仲間はずれにされたから、仕返ししたいんだよ！……ってあれ？お前ハーブか？」

「も、もしかして…ア…アキラじゃない！」

アキラという電波体とハーブは何らかの関係があるらしい。

「ロック、2人は知り合いなの？」

少しためらいがちにウォーロックが言った。

「こいつらは…地球でいう恋仲だったんだ」

スバルはハーブは戦わないと言つに違いないと思った。

「そ、そうなんだ……」

そして予想通りのことをハーブが言った。

「私、戦えないわ……ごめんウォーロック……」

仕方なくスバルは1人で戦うことになった。

〈太陽系中心部〉

「ヴィーナスよ……順調か？」

ギャラクシーは聞いた。

「FM星人のアクイラという電波体にとりあえず任せています」

アクイラはヴィーナスの部下だったようだ。

「分かった……任せたぞ、ヴィーナス……」

「分かりました、では」

そしてヴィーナスは地球に戻って行った。

わし座と琴座（後書き）

次回バトルが始まります。

向かい風

「来るぞ！スバル！」

するとアクイラは素早い動きで自分の周りを回り始めた。

「チツ…！これじゃあ狙いを定められねえ！」

「それなら…グランドウェーブだ！くらえっ！」

しかし、攻撃が当たってもアクイラは気にせず回り続けている。そしてスバルは周囲の異変に気がついた。

「こ、この技、竜巻を起こしているみたいだよ！早く出ないと……くっ…！」

気付いたときは遅かった。もうスバルは完成した竜巻の中に飲み込まれていた。そして、スバルたちは上に飛ばされた。

「いきますよスバル君！」

キザマロは風の剣を作り、上に飛ばされ無抵抗のスバルの体を斬りつけた。スバルの体に激痛がはしった。

「くっ！今度は僕の番だ！ソードファイター！」

しかし、すべての攻撃を紙一重で避けられてしまう。

「遅すぎますよスバル君！」

と言うと、一瞬にしてスバルの目の前に現れ、連続攻撃を浴びてきた。

「どつすればいいんだ…」

自分の攻撃は全てかわされ、相手の攻撃は全てまともに受けてしまっている。この状況がずっと続けば体力がなくなり勝ち目はない。

「仕方ない…おい、スバルこのカードを使え！」

するとスバルの前に見た事のないカードが現れた。

「カマイタチ？ ロックこのカードどうやって手に入れたの？」

「これはサテラポリスが新しく作ったバトルカードで、一枚大吾からもらったんだ…これなら見切られる事は無いはずだ…いくぞっ！ スバル！」

スバルはこの見た事のない新しいカードを使った。

「くらえっ！ カマイタチ！！！」

すると、風の刃がアクイラの体に命中した。そしてのけぞっているところに追撃をくわえた。

「ソードファイター！」

アクイラは追撃にも耐えたが、今のでかなりのダメージを負っているようだ。

「やりますね…スバル君…でも、これから勝負ですよ…」

スバルはこれ以上キザマロを傷つけたくなかった。

「キザマロ！もうやめようよ…こんなことしても意味ないよ…キザマロ、君は僕たちのブラザーなんだよ！」

しかし、キザマロは戦いをやめる気はないらしく、

「そのブラザーを仲間はずれにし、僕にこんな事をさせているのはあなたたちです！いきますよ！」

と言い攻撃をしてきた。

「くっ！キザマロ聞いてくれ！それは勘違いだ！」

するとキザマロの攻撃の手がやんだ。

向かい風（後書き）

次回くらいで対アケイラ戦を終わらせる予定です。

ヴィーナス現る！

「僕たちはキザマロを驚かそうとして、こっそり誕生日パーティーの用意をしていたんだ…別にキザマロを仲間はずれにしていたわけじゃないんだ！信じてよ！キザマロ！」

「…ぼ、僕は勘違いをしてこんなことを…す、すみません、スバル君…」

キザマロはとても反省しているようだった。しかし、

「お前が戦う気がねえなら、勝手に暴れさせてもらっぜ！くらえっ！」

アクイラは無防備な状態になっているスバルに攻撃した。

「うわあっ！…もう体力が限界だ…」

アクイラはスバルにとどめをさそうとしたが突然動きが止まってしまった。

「ス、スバル君今のうちに…僕は大丈夫ですから攻撃してください…うわあっ！」

スバルはキザマロの言葉を信じ攻撃をした。

「今助けるからね！キザマロ！ソードファイター！！！」

「ぐわあああ！！！！！」

スバルの攻撃によりアクイラの電波変換が解けた。キザマロは気を失っている。

「チツ…まだだっ！次は絶対倒してやるからな！覚えておけ！」

と言って、逃げようとしたとき、

「次はないと言ったはずですわ、ヴィーナスサンダー……！」

アクイラめがけ雷が落ちた。

「…ぐっ！…チツ！…もう終わりか…逃げる！2人とも…すまなかつた…ぐっ！お、俺は奴に脅され…ぐわああ……！」

2発目が落ちた。

「早く逃げる……！」

「逃がさないわ！3人まとめてデリートしてやるわ！ヴィーナスボルト……！」

2人はキザマロをかかえ攻撃をかわしながら逃げ出した。後ろではアクイラがヴィーナスに向かって飛んで行きヴィーナスを巻き込み自爆しようとしていた。

「アクイラ……ダメッ……！」

ハーブが叫んだ。

「あばよ！ハーブ！！」

空中で大爆発が起きた。

くキザマロの家く

「み、みなさんありがとうございます…迷惑をかけてすみません…」

キザマロの家では誕生日パーティーが行われていた。ミソラの曲やハッピーバースデートゥーユーの曲をみんなで歌った。キザマロが生きてきた中で一番楽しく感動した誕生日パーティーだった。そしてこれからの誕生日パーティーの中でも一番思い出になるであろう……

外では…

「アクイラ……」

夜空に浮かぶ星を見つめながら涙を流す琴の形をした電波体が一体泣いていた……

（太陽系中心部）

「ケガはどうだ？ヴィーナスよ…」

ヴィーナスは傷だらけになっていた。

「今晚中にネプチューンが治してくれます…またすぐ地球に行きま
すわ…」

「わかった…あいつを甘く見すぎたはならぬぞ…ヴィーナス」

「わかりましたわ」

ヴィーナスは海王星に向かって行った。

ヴィーナス現る！（後書き）

アキラ戦終わりました。

今日はもう1話投稿します。

水星のカケラ

（キザマロの事件の一週間後）

「おい、起きろスバル！ 遅刻するぞ！」

いつも通り時間は遅刻寸前だった。しかし、スバルはゆっくり眠そうに起きた。

「……まったく……今日は創立記念日で学校無いから遅くまで寝ようと思っただのに……」

今日はコダマ小学校の創立記念日で全学年が休みだった。それなのに起こされてしまい少しいらだっているようだ。着替えを終えリビングに行こうとした時、ハンターV.Gにメールがきた。

「暁さんからだ……なんだろう？」

☐ スバルへ

この前の惑星の守護者のことで分かった事があったから、これからWAXAに来てくれないか？

サテラポリス 暁 シドウ

☐

と書いてあった。

返信をし、スバルはリビングに行った。

「おはよう、スバル、今日は早起きだね。どうかしたの？」

「暁さんに呼ばれたんだ」

朝ご飯食べ終えたスバルは家を出てWAXAに向かった。

「美しい室」

美しい室ではヨイリー博士たちがいた。

「スバル、この前の事で分かったことを説明するな…この前スバルが入院してた時、ウォーロックの体も調べさせてもらった…そしてらウォーロックの体からいつもとは違う周波数が出ていた…それでその体のデータを調べたところ、この星の物ではない強力な力が封じ込められた物体が見つかった…」

おそらく、これはお前が戦ったマーキュリーのものだろう…俺たちはそれを水星のカケラと名付けた」

「ってことはその水星のカケラの力が引き出されれば僕はもっと強くなれるってことですよな？」

マーキュリーに勝てなかったスバルはヴィーナスに勝てるか不安だった。この力があれば勝てるかもしれないと思った。

「ああ、でもその方法は今のところないし、あつたとしてもお前がその力に耐えられるかは分からない」

スバルは少しがっかりした。

「ありがとうございます、暁さん」

帰ろうとするスバルに天地さんが声をかけた。

「用があるって大吾さんが呼んでたよ、スバル君、ちなみに7階の研究室が大吾さんの研究室だよ」

そしてスバルは7階に行った。

↓7階 大吾の研究室↓

スバルは研究室に入り大吾に声をかけた。

「父さん、用って何？」

大吾は何かを作っていたが、作るのをやめスバルに言った。

「この前言ってたヴィーナスがいつ来てもいいように、新しいカードを作ったからデータを送ろうと思って呼んだんだ」

スバルは大吾にハンターV.Gを渡し、データを送ってもらった。

「このカードはクリムゾンキャノンと言ってクリムゾンドラゴンに吸収されたときに体の中にたまったノイズを圧縮したものを相手に打ち込むカードだよ…他の物に影響を及ぼさないようにするのが大変だったんだ…」

「ありがとう、父さん」

そしてスバルは家に帰り遅刻しないようにと早めに寝た。

約束

くコダマ小学校く

金曜日になりHRも終わったスバルは学校を出て家に帰ろうとした。すると後ろから委員長が声をかけた。

「スバル君、明日暇でしょ？ ゴン太とキザマロも呼んでるから明日うちに来なさい！ いいわね？」

委員長の言う通りスバルは暇だった。

「わかった、じゃあまた明日く」

そう言ってスバルは家に帰っていった。家の前についた時、後ろから突然目を手で隠されてしまった。

「だ〜れだ？」

その声はあの人気アイドル響ミソラの声だとすぐ分かった。

「ミソラちゃん？」

「正解く」

と言うと、手を外した。後ろにはミソラがニコニコしながら立っていた。

「久しぶりに、会いに来たの … スバル君、明日一緒にベイサイド

シティで買い物しない？久しぶりに休みが取れて、次いつ会えるか分からないの…だから、お願い」

ミソラは上目遣いにしながらスバルを見た。

（久しぶりって、この前誕生日パーティーの時に会ったけど……でもどうしよう……委員長と約束してるし……でも当分会えないなら……）

スバルはとても迷っていた。しばらく考え、

「……分かった……じゃあ何時に集合する？」

ミソラはとても嬉しそうだった。

「じゃあ、9時にウエーブライナーの改札でいい？」

「いいよ」

「じゃあね〜 明日楽しみにしてるねスバル君」

そうして2人は家に帰った。スバルは家に着くと、スバルは委員長に電話をした。

「ごめん、委員長、明日は急用が入っちゃって行けなくなっちゃった」

委員長は怒っていた。

「ふ〜ん……どうせ、またミソラちゃんとデートにでも行くつもり

でしょっ！せいぜい2人で仲良くいちゃいちゃしてなさい！！」

ブチッ！

「何で、あんなに怒ってるんだろ？」

(やっぱり鈍感だな…………)

ウォーロックがあきれているなか、スバルは委員長のカンの良さに少し感心してしまっていた。

(僕がミソラちゃんと遊びに行くことが、あんな簡単にはれてしまっうなんて…………)

〈 委員長の家 〉

「何よ！ スバル君！ 私と約束した後にミソラちゃんと家の前でデートの約束をするなんて…許せない！」

委員長はどうやらスバルがミソラと約束しているのを見ていたよっうだった。

約束（後書き）

次からミソラとのデートです。

ミニレポート(前書き)

一週間ぶりの投稿です。

今後ともよろしくお願いします。

ミソラとデート

「次の日」

「……ちょっと早く来すぎたね……」

「はりきりすぎだぞ、スバル」

スバルの顔が赤くなった。

「そ、そんな事は無いよ」

時計は8時30分を示していた。ウォーロックと話していると、

「スバルくん！」

前の方からミソラがやって来た。

「早かったね、ミソラちゃん」

すると、ミソラはにこにこしながら、

「スバル君と早く会いたかったから早く来たんだ」 じゃあ、
行こうか！」

ミソラはスバルの手を引っ張り、ウェーブライナーに乗って、ベイサイドシティに行った。

「電車の中」

「今日はあそこに行って、ここに行って……」

ミソラは今日の予定を立てていた。

(そんなにたくさん行くんだね……)

スバルは半分苦笑いでミソラの予定を聞いていた。

「そういえば、ハープは？」

ミソラのハンターV.Gは空だった。

「この前のことで、ここに来る気分じゃないみたい……」

「そっか……」

ハープはアクイラが死んでしまったことにながりのショックを覚えていたみたいだ。

くベイサイドシティく

ウェーブライナーを降りると、そこには都会の町並が広がっていた。

「今日は、新しくできたデパートがあるから、そこに行くよ」

そして2人は大きなデパートに入って行った。

たくさん買い物をし、スバルが大量の荷物を持ったのは言うまで

もない。

「たくさん買うね……」

大量の荷物を持ったスバルが言った。

「ありがとう、スバル君」

ミソラは嬉しそうだった。スバルはミソラが喜んでいるのを見て、

(喜んでくれてる……良かった)

昼になったので、2人は近くのカフェで昼食を食べることにした。

「このサンドイッチおいしいね！」

と言いながら、ミソラはサンドイッチをすぐにたいらげってしまった。

「……ス、スバル君……えっと、言いたいことがあるの」

ミソラの顔が赤くなっていた。

「言いたいことって何？」

さらに赤くなりリンゴのようになってしまうた。

「えっと、その……わ、私……」

ミソラとデート（後書き）

中途半端なところで終わりました。
次回事件です。

停電

「えっと、その……わ、私……スバル君の事が……す……！」

ミソラが言い終わらないうちに、突然電気が消え、暗くなった。

「て、停電!？」

突然の停電で人々はパニックに陥っていた。

「スバル、強力な電波を感じるぜ！」

強力な電波のもとに行くため、スバルは電波変換した。

「ミソラちゃん、行ってくるね」

そして、スバルは電気を管理しているコンピューターに行った。

電気だけが影響を受けているためウェーブロードに変化は無かった。

「ここはどこかにいるぞ！」

とても広い電脳で、コンピューターの中の管理システムを探すのには時間がかかりそうだった。

「お待ちせ！」

後ろで声があったので振り返ると、そこにはハープ・ノートとなっ

たミソラがいた。

「あれ？ ハープはいないんじゃないの？」

「ハープに話したら、来てくれたの！」

すると、ハープが現れ、

「ポロロン……いつまでも落ち込んでるわけにはいかないからね……」

そうは言ってるがいつもより表情が暗かった。

「じゃあ、手分けして探すよ」

と、スバルが言い2人は手分けして探し始めた。

「スバル君に伝えられなかった……はあ……」

ため息をつきながら歩いて行くと、管理システムと思われる装置があった。

「見つけた……いくよっ！ ショックノート・フォルテッシモ！」

しかし当たる直前に雷によって攻撃ははじかれてしまった。

「そうはさせませんわ、ヴィーナスサンダー！」

「きゃああ〜！〜！」

ミレナはその場に倒れてしまった。

停電（後書き）

次回からヴェーナス戦です。

ヴィーナスの雷

その頃、スバルは……

「ミソラちゃんが言いかけた事って何だろう？」

すると、ウォーロックは言った。

「スバル、お前って本当に鈍感だな……」

そうやって話していると、いきなり、

「きゃああゝ！！」

遠くで大きな叫び声が聞こえた。

「み、ミソラちゃん！！」

スバルはミソラのいる方まで全速力で走った。

そして管理システムの装置のところにとどり着いた。そこにはミソラが倒れていた。

「ミソラちゃん！」

声をかけたが、気絶しているようで返事がない。

「ついに来たわね、ロックマン」

スバルは怒りをあらわにしていた。

「絶対、許さない!!!! ウッドスラッシュ!」

スバルはヴィーナスの体を斬りつけようとした。しかし、剣が体に当たった瞬間、電磁波がおき、スバルにダメージを与えた。

「物理攻撃が効かないなら……パウダーシュート!」

しかし、簡単に避けられてしまった

「そんな単純な攻撃しかできないのです?それなら、ヴィーナスサンダー!」

太い雷がスバルの頭に降り注いだ。

「なんて威力だ……次は僕の番だ!クサムラストージ!」

すると地面が緑に染まった。

「いくぞっ! ジャングルストーム!」

クサムラを吸い取り、ヴィーナスにダメージを与えた。

「少しはできるみたいね……現れなさい!電波獣!」

鳥の格好をした、黄色い電波獣が現れた。

「チッ! 厄介なのが出て来たぜ!」

「いくわよ！サンダーフレイム！」

ヴィーナスの技はかわしたが電波獣の攻撃は防げなかった。

「くっ！でも、僕は負けるわけにはいかないんだ……くらえっ！
コガラシ！」

竜巻がヴィーナスに全てヒットした。

「この程度、たいしたことないですわ……面白い技を見せてあげる
わ！」

いきなり、ヴィーナスの体が光りだした。

ヴィーナスの雷（後書き）

次回もヴィーナス戦です。

アースの力！

やがて、ヴィーナスの光が一点に集まった。

「くらいなさい！ヴィーナスレーザー！」

スバルは体の力が抜けて行くのを感じた。

「……力が抜けてく……でも、僕は負けるわけには行かないんだ！」

スバルは新しいカードを使った。

「くらえっ！ 父さんが作ったカードだ！ クリムゾンキャノン！」

ノイズの塊がヴィーナスに命中した。

「なかなか、やるじゃないの……でも、これで終わりよ！究極奥義、ヴィーナスボルテックス！」

スバルは金縛りにあったように動けなくなった。

「くっっ！……これで終わりか……」

ヴィーナスの手に電波獣が宿り、その手から太い電撃のレーザーが発射された。

しかし、その攻撃はスバルには当たらなかった。

「アースシールド！」

という声と共に1つの電波体が現れた。しかし、その電波体はヴィーナスの攻撃を防ぎきれず、大ダメージを負ってしまった。

「くっ！……私は地球の守護者、アースだ……ロックマン、大丈夫か？」

スバルの金縛りが解けた。

「ありがとうございます、僕は大丈夫ですから、その女の子を助けてください、お願いします！」

アースは、

「分かった……ロックマン、この前は大丈夫だったか？」

「この前助けてくれたのは、あなただったんですか……ありがとうございます」

スバルはお礼を言った。

アースはだいぶダメージを負い、疲れているようだった。

「私を無視してもらっては困りますわね、アース……」

突然ヴィーナスの声がした。

「後は僕に任せてください！」

アースはうなずいた。

「分かった……今からお前に力を与えよう……この力を使えば勝てるだろう」

すると、スバルは

「俺の力をお前に授けた……使いこなせるかはお前次第だ……」

そして、そう言うとミソラの治療を始めた。

「絶対負けない！　いくぞヴィーナス！」

「かかって来なさい！」

そして、バトルが再開された。

アイスの力！（後書き）

次回くらいでヴィーナス戦終わりです。

新たな変身！（前書き）

そろそろ試験が近いのでいったん休止するかもしれません。

新たな変身！

「絶対負けない！　くらえ、カマイタチ！」

風の刃がヴィーナスを切り裂いた。

「うっ！……いきますわ！　ヴィーナスサンダー！」

今度はスバルに一筋の雷が落ちた。

「くっ……！！」

すると、ウォーロックが、

「おい、スバル……力がコントロールできねえ……やばいぞ！」

「うわああああ……！！」

スバルは正気を失ってしまった。

「ハカイ……スベテコワス」

スバルは暴走をし、周りの物に無差別に攻撃をした。

「ど、どうしたんですの？」

ヴィーナスの事も気にせず暴走しているスバルに青い雷が落ちた。

「ぐっ！……ぼ、僕はいつたい何を？」

スバルは正気に戻ったようだ。

「正気に戻っても私が勝つ事には変わりないですわ」

ヴィーナスは自信に満ちた表情で言った。

「ち、力が湧いてくる……」

突然、スバルの体が眩しい光を放った。次の瞬間スバルはベルセルクの色を少し茶色っぽくしたような姿になっていた。

「な、何ですか？ その姿は？」

すると、ウォーロックが答えた。

「フュージョンアース、それが今の姿の名前だ……スバル、スーパーアーマーがついていて無属性の攻撃に移動不可が……そして、カウンター時にカードの威力が2倍になり、フォルダが専用の物になる……それがこいつの能力らしい」

「わかった……いくよ！ ヴィーナス、タイフーンダンス！」

無属性の攻撃で動けなくなったところにさらに、追撃をくわえた。

「っ、強いじゃないですか……ヴィーナスボルト！」

「隙あり！」

ヴィーナスのカウンターを取り、2倍のダメージを与えた。

「これは……？」

スバルが聞いた。

フラネットフォーススピックバン
「PFBで言つて、カウンター時に来るカードの代わりに、超強力な一撃みたいだぜ！」

ウォーロックが言った。

「じゃあ行くよ！ とどめだ、グラビティアースイレイザー！」

極太の重力のレーザーによって、ヴィーナスはデリートされた。

惑星の争い（前書き）

お久しぶりです。

今日から投稿始めようと思います。

惑星の争い

「……勝った……」

スバルはその場にひざまずいた。するとアースがスバルの目の前に現れた。

「よく戦ってくれた、ロックマン、感謝しているぞ」

ミソラを抱えたアースが言った。

「こちらこそありがとうございます……でも、なぜ他の惑星の守護者が地球に襲撃してるんですか？」

「……それには理由があつてな……」

〈 始業式の前夜・太陽系中心部〉

「そろそろ太陽系の電波の周波数も変えなければならぬ……ほぼ全宇宙で変えているからな……とりあえず地球と天王星からだ……より良い環境のために、いいな？」

「そんなことしたら、地球は人間がいなくなり、生き物のほとんどが消えてしまいます！」

アースは人類を守ろうと必死に反抗した。

「うるさい、お前は黙ってればいいのだよ、アースよ……人類などいなくても良いのだから」

ギャラクシーにとって人間はどうでもいい存在だった。

「……でも、私にはできません、そんな事！」

「フッフ……それなら仕方ない、マーキュリーにやらせよう……俺の命令に従わないお前にはここで消えてもらおう……！」

攻撃を少しくらったものの、すぐに、アースは眩しい光とともに消えてしまった。

「奴を追えっ！マーキュリー！周波数を変えないなら、奴の星もろとも破壊してやれ……！」

「……というわけだ……私のせいでこんな目に遭わせてしまったすまなかった、ロックマン」

「別に気にしないでください、これで4回目ですから」

しかし、アースは暗い顔で

「あとは私がなんとかするから、安心してくれ、ロックマン」

と言つて去つてしまつた。

「……帰るぞ、スバル」

ウォーロックが言った。

スバルはミソラを抱え現実世界に戻つた。

デートの終わり

事件の後、ミソラは公園のベンチで寝てしまっていた。そしてしばらくたち、

「……あれ？ 」「どこどこ？」

ミソラが起きた。

「ここは、ベイサイド中央公園だよ、ミソラちゃん大丈夫？」

スバルはミソラの事をとて心配していたようだった。

「私は大丈夫だよ……って、もうこんな時間だ！ 仕事に間に合わない……」

慌てて駆けて行こうとするミソラにスバルが言った。

「事務所には連絡しておいたから、平気だと思っよ」

ミソラはにっこり笑い、

「さっすがスバル君……ってことは、まだ一緒にいれるってことだね、スバル君」

その後ミソラはたくさん買い物をした。そして6時頃になり、

「今日は大変だったけど、楽しかったね、ミソラちゃん」

とスバルが言った。

「今日はありがとう、スバル君」

ミソラもとても楽しかったみたいだ。

「じゃあね、ミソラちゃん」

と言って帰ろうとすると、

「待って、スバル君」

ミソラが引き止めた。

「あ、あの、私、スバル君の……」

その頃……宇宙では……

く太陽系中心部く

「帰って来たか……アース」

ギャラクシーが言った。

「ああ、お前を倒すためにだ！」

と、アースが言うが、ギャラクシーは軽く笑い、

「できるものならやってみたまえ」

と言った。

「くられ！ アースグ……ぐわっ！」

アースが技を出そうとした瞬間、眩しい閃光がはしった。

データの終わり（後書き）

ちょっと中途半端なところで終わらせてみました。

新たな刺客

「くらえ！ アースグ……ぐわっ！」

アースが技を出そうとした瞬間、眩しい閃光がはしった。

「愚か者め……！」

アースはその場に倒れてしまった。

「ゆけ！ ダーク……スよ！」

ギャラクシーの前には謎の黒い電波体があった。

「お前の力を、ロックマンに見せてやれ！」

謎の黒い電波体はうなずき、地球に向かって行った。

（ベイサイドシティ駅前）

「あ、あの、私、スバル君の……えーと、スバル君の好きなシューティングスターの曲が入ったアルバムを出すから買ってね……じゃ、じゃあね」

と言って行ってしまった。

「ミソラちゃん、何でそんな事で呼び止めたんだろう？」

(気付いてねえのか……やっぱり、こいつは鈍感だな)

そして、スバルは家に帰った。

一方ミソラは……

「結局伝えられなかった……」

「まだチャンスはあるわよ、ミソラ」

ハープに励まされながらミソラは家に帰っていた。

「スバルの家」

「ただいま」

あかねがニコニコしながら近づいて来た。

「今日のデート楽しかった？」

「そんなんじゃないってば」

いつものようにスバルはからかわれながらベットに行き、寝た。

委員長の怒り

「スバルの家」

「行ってきまーす」

スバルはそう言って学校に向かった。

いつもとは違い、まだ時間は余裕だった。

「コダマ小学校」

「ふう〜今日は早くついたね、ロック……」

不意に後ろから殺気を感じた。後ろを振り返ると、委員長が立っていた。

「おはよう、スバル君……昨日は楽しかった？」

口では穏やかに言っているが、内心怒っているのは明らかだ。

「ま、まあ楽しかったよ……」

言った後にスバルは後悔した。なぜなら、委員長の怒りに火をつけてしまったからだ。

「ふうん……まあ、そりゃ楽しかったでしょうね、人気アイドルと

のデートに私たちとの約束を断ってまで行ったんだものね……」

スバルは、これは謝らないとやばいと思い、

「ごめん、委員長！ ミソラちゃん忙しくてしばらく会ってなかったからさ……本当ごめん！」

「もう、いいわ！ 私たちより、ミソラちゃんとの約束を優先するなんて最低よ！」

委員長はかなり怒っていた。その日はその後一度も話をしなかった。

（放課後）

「あの……委員長、そろそろスバル君と仲直りしたらどうですか？」

「ひるさい……」

「は、はい、すみません」

委員長はまだ怒っていた。

「スバル君も謝ったほうがいいよ」

海碧が言った。

「そっだよね、やっぱり謝ろう……」

そして委員長の近くに行き、

「昨日は本当にごめん」

と、スバルは謝った。

委員長の怒り（後書き）

委員長は果たして許してくれるのでしょうか？

次は無い

「……許さない……と、言いたいところだけど、私は心が広いから、今回だけは許してあげるわ」

委員長があっさり許してくれた事に皆は驚いていた。

「あ、ありがとう」

スバルはほっとした。

「次やったらどうなるか分かってるわね？」

「は、はい……」

次はやらないぞ、とスバルは心に誓った。

「それはさておき、今度みんなでスピカモールに行かない？」

委員長が言った。

「何しに行くの？」

と、スバルが聞くと、

「新しいイベント会場で、天地さんが講演会をするらしいの……って、みんなもメール来てるでしょ！」

ハンターV.Gを見ると天地さんからメールが来ていた。

「本当だ……」

スバルが確認を終えると、

「というわけで、今週の日曜日の朝9時に改札で待ち合わせね、いい？」

「分かりました、委員長」

「おう、委員長」

「分かったよ」

すると、委員長はスバルの方を向き、

「いいわね？」

と、念を押した。

「分かったよ、委員長」

そして、それぞれみんな家に帰っていった。

天変地異（前書き）

お久しぶりです。

また投稿を再開しようと思っているので、お願いします。

天変地異

～次の日の朝～

「ゴン太は相変わらず遅いわね！」

委員長は少しいらだっていた。

(やばい……委員長怒ってる……)

それから5分くらいしてやっとゴン太が来た。

「遅いじゃないの！ 私を待たせるなんてどういふことが分かって
いるの！」

しばらくし、委員長の怒りが鎮まったところで、スバルたちは、
スピカモールに向かった。

～スピカモール～

新しいイベント会場に着いたスバルたちは天地さんのところに挨拶をしに行った。

「みんな、今日は来てくれてありがとう、いろいろと体験する
とができると思うから、楽しんでね」

「どういづことですか？」

スバルが聞いた。

「それは始まってからの楽しみだよ」

と言って、天地さんは行ってしまった。

〜30分後〜

「お待たせしました、これより、天地 守氏による講演会を始めます」

すると電気が消え、天地さんが話を始めた。

「みなさん、今日はお忙しいなかのご来場ありがとうございます」

突然天地さんの声が途切れた。そして他の声が、聞こえてきた。

「よく聞け、ロックマン、この天地とかいう奴の命は俺が預かる！返してほしけりゃ、この会場の電脳に來い！ 10分以内だ！」

声の主は、電脳の中に入って行った。するといきなり、体が重くなつた。

「な、何だ！？」

会場がどよめいた。

「くっ……体が重い……どうなってるんだ？」

息苦しさを耐えて、ウォーロックに聞いた。

「この辺りの重力が重くなってるみたいだな」

ウォーロックが言った。

「天変地異でも起きたのかと思った……そっちはどう？」

電波世界に影響が無いか心配したスバルが聞いた。

「こっちは大丈夫だ、少し電波が乱れているがな」

それを聞いて安心したスバルは電波変換をした。

（待っていてください、天地さん！すぐに助けますから！）

スバルが電脳に入ろうとした時、会場で委員長の声がした。

「ロックマン様？」

スバルは委員長の方を見た。しかし、委員長は自分のいる側じゃない方を見て、叫んでいた。

（どうしてだろう？）

疑問に思いながらも、天地さんを早く助けるためにスバルは電脳に入った。

天変地異（後書き）

なぜ委員長は違う方向を向いたのでしょうか？

次回は戦闘です。

新たな敵”ダークアース”！

～イベント会場の電脳～

（早く助けなきゃ……どこにいるんだ？）

不意に声がした。

「奥で待っている……ロックマンよ」

スバルは走り出した。

「よしっ！ 行くぞっ！」

スバルは奥に進んで行った。今までよりウイルスは格段に強くなっていた。

「はあ……はあ……なんて強さだ……」

「待っていたぞ、ロックマン」

少し先に黒っぽい電波体がいた。

「天地さんを返せ！」

スバルは電波体に向かって走り出した。

「こいつを返してほしいけりゃ、俺様を倒してみろ！」

電波体はよく見ると、どこかで見たことのあるような形をしていた。

「この戦いに天地さんは関係ないはずだ！」

スバルは怒っていた。

「関係なくとも、お前と戦うにはこうした方がいいと思ってな……
さあ、いくぞっ！」

「……絶対に許さない……！ バトルカード、クリムゾンキャノン
！」

ノイズの塊が相手に命中した。

「なかなかやるな……くらえ、ダークグラビトン！」

スバルは体が重くなるのを感じた。

「チツ……！ こいつ、相当な電波体だぞ！」

「フンツ！ 当たり前だ！ 俺はギャラクシー様の忠実な僕、
クアース様だ！」

スバルはやつと気がついた、この電波体の正体に。

「どつやら助けるのが他にもいたみたいだな！」

と、ウォーロックが言った。そしてスバルはソードファイターで
猛ラッシュをしようとした。

「いくぞっ！ ソードファイ…ぐわっ！」

スバルはカウンターを取られてしまった。

「くらえっ！ テラグラビトン！」

スバルは自分にかかる重力に耐えきれず、ひざまずいてしまった。

「さらばだ、ロックマン……グラビティレイザー！」

新たな敵”ダークアース”！（後書き）

次回委員長が間違えた理由が分かります。

もう1人のヒーロー

「さらばだ、ロックマン……グラビディレイザー！」

極太のレーザーがロックマンめがけて発射された。

「コバルトシールド！」

しかし、レーザーは突如現れたシールドによって防がれてしまった。

「ッ……何が起こったんだ……？」

スバルは閉じていた目を開けた。そこには自分を鏡に映したような蒼い色をした電液体が立っていた。

「き、君は？」

「僕はコバルトロックマン……間に合ってよかった」

スバルを助けたこの蒼い電液体はスバルを助けに来たらしい。

「詳しいことは後にして、まずはこいつを倒すよ！ 守りは僕に任せて、君は攻撃して！」

コバルトロックマンの声でスバルたちは戦いを再開した。

「仕方ない、まとめて倒してやろう！ グラビディウェーブ！」

しかし攻撃はコバルトロックマンによって防がれた。

「今だ！ ソードファイター！」

連続攻撃によって体勢を崩したところに今度はコバルトロックマンが追撃を仕掛けた。

「……なかなかやるな……現れる！ 電波獣アースケルベロス！」

すると、三つ首の禍々しい獣が現れた。

アースケルベロスとダークアースの攻撃はコバルトロックマンの守りを破り、2人に容赦なく襲いかかった。

「……くっ！ どうすれば……うわっ！」

「僕に秘策がある……もうちょっと耐えていて、スバル君」

スバルは驚いた。

「何で僕の名前を知っているの!？」

しかし、答えを聞く前に、スバルは相手の攻撃によって気を失ってしまった。

「とどめだ！ 究極奥義、ダークアースインパクト！」

「よし！ くらえっ！ コバルトリフレクト！」

ダークアースは自分の技を跳ね返された。すると大ダメージを受

けたダークアースの体が元の体に戻って行った。

「わ、私は何を……?」

正気に戻ったアースが言った。

「少し正気を失ってたみたいですね……ここはもう大丈夫ですから、あなたも休んでください」

アースはかなりの傷を負っていた。

「ああ、ロックマン、ありがとう」

アースはスバルとコバルトロックマンを勘違いしていたようだった。

「僕はあなたが知っているロックマンではありません、こっちが本物です」

そう言って、スバルの方を指差した。

「倒れているみたいだが、大丈夫なのか!？」

コバルトロックマンは微笑んだ。

「大丈夫です、後は私に任せてください」

アースはうなずくと、その場から消え去って行った。

「さあ、始めるか……コバルト……!」

もう1人のヒーロー（後書き）

コバルトロックマンとはいったい何者なのでしょう？
次回正体が明らかにならば！

ヒーローの正体（前書き）

今日は冬至ですね。

年末年始近くは、休ませてもらいます。

ヒーローの正体

「さあ、始めるか……コバルトヒーリング！」

コバルトロックマンの手から蒼い光がスバルの胸元に当てられ、スバルを回復し始めた。

「……ぼ、僕は……？ あ……君はコバルトロックマン、助けてくれてありがとう」

「さて、僕の正体を話す時が来たみたいだね、スバル君」

この少年はスバルのことを知っているみたいだった。

「君は一体誰なんだ……？」

「僕は、荒海 海碧だ……僕は君のことを何回か助けた、青い稲妻でね……」

スバルはとても驚いてしまった。まさか自分の学校に電波変換できる人がいると思わなかったからだ。

「どうして、海碧君が……？」

海碧は深刻そうに話を始めた。

「僕はこの星の人間じゃないんだ……僕はコバルト星という地球の環境に似ている星に生まれたんだ。僕の母さんは優しい人だった。僕は母さんのことが好きだった。でもあの日母さんはいなくなっ

しまったんだ……地球人によって……僕の家は、他の星との貿易を行っていたんだ。そこで地球人の恨みを買って、さらわれてしまったんだ。そして父さんはそのグループのボス、Mrキングとかいう奴に殺されてしまったんだ……僕の目の前でね……そのときの形見がこのハンターV Gなんだ……地球人との取引で手に入れたらしいんだ……」

「事件の日」

「と、父さん！」

キングによって海碧の父親はノイズにやられてしまった。

「……海碧……俺はもうダメのようだ……俺の部屋の引き出しに、地球人からもらった機械がある……
それを持って逃げる！……」

そのまま碧海の父親は息を引き取った。

「と、父さん……ぐすっ……」

碧海は駆け出し、父親の部屋に行くと、ハンターV Gを持った。すると、自分の首にかかっていた宝石とハンターV Gが共鳴し、光り出した。ハンターV Gを見るとさっきまでは無かったはずの宝石が画面にあった。碧海はそこを触ってみた。すると画面が光りだし、碧海は電波変換した状態で立っていた。

「……力が湧いてくる……」

碧海はキングのいた場所に戻った。キングはまだその場所にいた。

「そうか、君も電波変換できるのか……その姿、地球にいるあいつと似ているな……ハハハ、かかって来たまえ！そしてこのウィザードたちを倒してみたまえ！」

「絶対、負けない！」

碧海は何故か戦い方が分かっていた。

鮮やかに碧海はウィザードたちをデリートしていった。

「ほう、なかなかやるな……さらばだ！またいつか会おう！ハハハハ！」

そう言ってキングは去って行った。もう二度と会えないと言ったことを知らずに……

碧海の力！

「……………と言っわけなんだ」

スバルは碧海が自分以上の悲しみを耐えて生きて来たということが分かった。

「碧海君……………こんな悲しい話をさせてしまって、ごめん」

しかし、碧海はあまり気にしてないようだった。

「別にいいよ……………そういえば何でスバル君はあんな強い奴らに狙われてるの？」

スバルは起こった事件などを、詳しく碧海に話した。

「教えてくれてありがとう、スバル君……………僕も力になるよ」

スバルは戸惑った。自分以外の人を巻き込んではいけないと思ったからだ。しかし碧海は強い。

「……………」

「もし、良かったら僕と戦ってから決めてくれてもいいよ」

碧海の言葉により、戦ってから決めることにした。

「手加減なしだよ、スバル君。でもデリートまではしないようにしてね」

「(さすがにデリートはしないよ碧海君……) 行くよっ！ ソードファイター！」

スバルの連続攻撃だったが、全て紙一重でかわされてしまう。

「遅い攻撃だね、スバル君。連続攻撃っていうのはこういうものだよ！」

すると一瞬のうちに無数の傷がスバルの体についていた。

「クッ……これならどうだ、カマイタチ！」

この攻撃は碧海にダメージを与えられた。

「僕の力をちよっとだけ見せてあげるよ」

すると碧海の体の色がきれいなコバルトブルーから銀白色に変わった。

「いくよっ！ バトルカード、スタンナックル！」

素早さは失われていたが、一撃の重みが全く違った。

「っ、強い……！ でもこの遅さなら……！ バトルカード、グレートアックス！」

スバルの巨大な斧での攻撃を碧海は避けられなかった。しかし、碧海はその斧を片手で受け止めた。

「まだまだだね、スバル君……そろそろ終わらせてもらっよ……」
「それが僕の必殺技だ！ コバルトダイナマイト！」

青い光をまとった碧海が、スバルに突っ込んだ。そして大爆発が起きた。

碧海の力！（後書き）

ちょっと短くなっちゃいました。

新たなPGM（前書き）

あけましておめでとございます。
今日から投稿を始めます。

新たなPGM

碧海の攻撃によって気を失ってしまったスバルは、病院に運ばれて行った。

「ここは……病院？」

スバルが部屋を見てみると、外から碧海の声がした。

「スバル君……入ってもいいかな……？」

「……いいよ」

すると、碧海が申し訳なさそうに入ってきた。

「……昨日はごめん」

「別に大丈夫だよ、碧海君、心配しないでね」

そう言って、スバルは碧海のことを許してあげた。

「……ありがとう、スバル君」

そして碧海は帰って行った。しばらくすると、今度はシドウの声がした。

「入るぞ、スバル」

そしてシドウがスバルの病室に入って来た。

「スバル、大事な話がある。ちょっとついて来てくれ」

「で、でも僕はまだ……」

言い終わらないうちにシドウがスバルに言った。

「もう退院していいそうだよ」

そして、退院したスバルは、シドウとともに研究室まで行った。

「大事な話って何ですか？」

「スバル、俺たちはあの後研究を重ね、惑星の欠片の力をコントロールできるようなプログラムを開発した。その名も、プラネットP GMだ。話つてのは、これをお前のハンターV Gにいれる作業をするからハンターV Gを少しだけ貸してくれないか、っていうことなんだ。貸してくれるか？」

「いいですよ」

スバルのハンターV Gの中にプラネットP GMをいれる作業は、1時間くらい続いた。今までのプログラムよりデータの量がかなり多かったためだ。

「……………やっと終わった……………スバル、これを使って地球を守ってくれ」

「はい、頑張ります」

そしてスバルは、家に帰り、みんなで2回目の退院パーティーをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7316w/>

流星のロックマン4 ~ the planet ~

2012年1月4日11時45分発行